

トニ・モリスンの「レシタティーフ」にみる 三角形のきずな

国際関係学科 鶴殿 えりか

「レシタティーフ」(“Recitatif”) (1983) はトニ・モリスンの唯一の短編小説という特権的なテキストであり、アミリ・バラカ、アミナ・バラカ編集のアフリカ系アメリカ女性作品アンソロジー『確認』(Confirmation) (1983) に所収された。「レシタティーフ」は、八歳の時、それぞれ母親の養育不能のため児童養護施設に預けられた、二人の少女トワイラとロバータの物語である。本論では、次の四つの観点から、この短編小説について考察する。すなわち、1. 人種、2. 歴史・社会、3. 物語の枠組み、4. 三角形のきずなという観点である。「三角形のきずな」とは、二人の女が深い関係を結ぶ時、二人だけではそうすることが難しく、第三項の存在が必要である、ということの意味している。このことについては後に説明することになるだろう。

モリスンの作品のテーマは、人種、そして、アフリカ系アメリカ人の歴史であるとはよく言われていることであるが、それがもっとも重要なテーマなのかどうか、1 から 4 まで順を追って考えてみよう。

1. 人種

主人公トワイラとロバータは、白人と黒人のペアであることが冒頭で明らかにされている。この短編小説で作家が試みていることは、白人か黒人かどちらかである二人の少女の人種を最後まで明らかにしない、ということである。そのように設定されているこの物語は、その事実だけで人種的テーマを内包しているといえるであろう。少女たちの母親は、両方とも、強い人種的偏見を持っている。しかし、人種的な言及が多分に含まれているにもかかわらず、肝心の少女たちの人種アイデンティティという重要な情報は最後まで明かされない、という倒錯した状況があり、それが読者をいらいらさせ不安にさせる。Elizabeth Abel の論文“Black Writing, White Reading: Race and the Politics of Feminist Interpretation” (1993)が明らかにしたように、いかに白人らしさ、黒人らしさをテキスト中から探し出してきても、それが決定的要素とならず、人種を特定することができない。エイブルと友人ルーラは互いにまったく異なった読み方をした。エイブルはトワイラが白人、ロバータが黒人と読んだのに対して、ルーラはトワイラが白人、ロバータが黒人と読んだ。歴史・文化的な見地、言語的見地、身体的特徴、考え方の特徴等、様々な見地から見て、両者の意見にはそれなりに説得力があった。すなわち、トワイラが白人としても黒人としても、ロバータが黒人としても白人としても、どちらにも読むことが可能なのである。「テキストにおける多種多様な人種の書き込みが要約的読みを拒むのだ」(106) とエイブルは言う。エイブルは思いあまってモリスンに手紙を書いて尋ねたところ、作家は「この物語の意図は、典型的なカテゴリー化にくさびを打ち込むために、人種的コードを階級へと置き換えることです」(106)と説明したため、解決するどころか余計わからなくなった、とのことである。

しかし、トニ・モリスンとはつねに「レッド・ヘリング(目くらまし、間違った方向に誘導するもの)」

を仕掛ける作家であることを考えれば、むしろあからさまなこの人種の問題はその仕掛けの一つであるように思われる。作家が答えているように、この短編小説の主眼はむしろ人種にはないのである。前述のような、人種を不明にする仕掛けは、この後の小説『ベラヴィド』(*Beloved*)、『ジャズ』(*Jazz*)、『パラダイス』(*Paradise*)においても繰り返される。たとえば、『パラダイス』では、修道院にいる女たちの様々なエスニシティは不明のままにされているが、一方相対するルビーの町は黒人の純血を守り、純血の人しかいないということになっている。しかし、修道院は鏡面／水面として機能し、ルビーの人々の姿は修道院に写し出される。すなわち、それは、ルビーの人々が守っている黒い混じりけのない血とは幻想にすぎないことを示すための装置となっている。

2. 歴史・社会

この小説に描かれたできごとはいつ頃に設定されているのだろうか。おおまかにわかりはするものの、例えばフォークナーの小説に見られるような細部に至るまでの時間的正確さには、モリスンは関心がない。しかし、周辺の事情、当時の社会状況は克明に書き込まれている。「レシタティーフ」で描かれているのは、ジャンクな食物や大量生産の商品に溢れるアメリカの大衆消費社会である。二人の少女の長きにわたる葛藤を描いたこの物語は、同時に彼女たちを取り巻く歴史・社会的な事象とともに描かれ、個人の内面の問題と社会とが常に接合されて描かれている。とくにスクール・インテグレーションを巡る騒乱は、親子の問題が描かれるこの短編において適切な題材である。¹ トワイラが居住するニューバーグでも、1975年に市の全公立学校に人種統合の命令が出され、大混乱に陥ったとされている。² この状況が物語の中に描かれているが、曖昧なままにされている箇所も多い。むしろ正確な歴史を反映することを回避しているようにも見える。物語は、最初の出会い、一回目の再会、二回目の再会、三回目の再会、四回目の再会、の五部から構成されているが、それぞれの年代は、文化的なアイコン等からある程度読み取ることができる。しかし、特定することはできない。住民が、その店が A&P スーパーマーケットに変わっても、Rico's という昔の名前でいつまでも呼んでいるように、歴史と、時の流れの中で生きている人々の意識はつねにずれている。「レシタティーフ」では、この A&P を Rico's と呼び続ける人々の視点から歴史の事象が眺められている。この物語には、以下に示すように、それぞれの時代を表す多くの文化的アイコンがちりばめられており、それらが世に存在した時期から、それぞれの時を類推することができるようになっている。

1) 児童保護施設 St. Bonny's での最初の出会い。ともに8歳。2月末から4ヶ月間をともに過ごす。ボウゾウへの言及から、早くとも 1949 年以降のことであることがわかる。

- Big Bozo = Bozo the Clown: テレビ番組のキャラクター、1949 年から。
- *The Wizard of Oz*: 1939 年映画。
- Spam: 豚肉ランチョン・ミートの缶詰、1937 年から。
- Salisbury steak: 偽物のステーキ、1897 年から。
- Yoo-Hoo: チョコレートドリンク、1940 年代から。
- Chiclet: チューイングガム、1906 年から。
- Jell-O: インスタント・ゼリー
- Elmer's: 文房具
- Lady Esther dusting powder: 化粧品

2) 施設を出て8年後。ともに 16 歳。8月、ニューバーグ近郊のハワード・ジョンソンのカフェテリアで出会う。トワイラは、ニューバーグから通いでウェイトレスのアルバイトをしている。当時流行の奇抜な格好をしたロバータは、ジミ・ヘンドリックスに会いに LA へ向かう途中だと言う。この時期は 1968 年頃のことであろう。それから逆算すると、最初の出会いは 1960 年頃ということになる。

- Jimi Hendrix: 1967 年 6 月 16～18 日開催された、世界初の野外ロック・フェスティバルである Monterey Pop Festival に出演して後、一世を風靡した。
- Howard Johnson Inn-Newburgh: 1968 年オープン。

3) さらに 12 年後、二人は 28 歳。6 月。トワイラは消防士ジェイムズ・ベンスンと結婚、息子ジョーゼフをもうける。裕かではないが家庭的幸福を手に入れる。ロバータは、IT 関係企業の幹部ケネス・ノートンと結婚、四人の子の継母となっている。高級住宅地アナンデイルに在住、運転手つきの自家用車に乗る裕福な暮らしをしている。前の出会いが 1968 年頃であるとする、この時は 1980 年頃ということになる。

- A&P: アメリカ最大規模のスーパーマーケット・チェーン
- Food Emporium: ニューヨークを中心に展開する高級スーパー・チェーン
- IBM
- Klondike ice cream: 1922 年から。

4) スクール・インテグレーションに絡む人種騒動の時代。8月～10 月まで6週間続く。トワイラの息子ジョーゼフは中学生である。この時期は前回から少なくとも 5 年は経過している。

- “Today”: アメリカ初の朝のニュース番組、1952 年から。
- “The Price Is Right”: 値段当てゲーム番組、1956-65 年、1972 年から。
- “The Brady Bunch”: ホームドラマ、1969 年から。
- Tab: ダイエットコーラ、1963 年から。

ニューバーグ周辺では 1960 年代後半からしばしば人種暴動が起きた。最大のものは 1978 年、Newburgh Free Academy で授業のボイコットがあった時である。ニューバーグ市では、1975 年 7 月 25 日スクール・インテグレーションの命令が出され、騒動が続いた。

5) 二人の和解。Christmas シーズン。トワイラの息子ジョーゼフは SUNY の大学生。ジョーゼフの年齢を考えると、スクール・インテグレーション騒動の時から 4～7 年ほど経過していると思われる。トワイラはひどく疲れている。

- Plexiglas: 1933 年から。

「レシタティーフ」では、1960 年代からスクール・インテグレーションの時代へと至るアメリカ社会を、その公的歴史の側面からではなく、大量生産社会のアイコンを通じて生活者の視点から眺めることができる。しかし、物語内のできごとと実際の年代や場所は必ずしも合致してはいない。読者は現実とフィクションがつねに一体であると考えべきではない。そうすることはフィクションの可能性を著しく狭めてしまうことになるだろうから。

3. 物語の枠組み

モリスンの他の小説と同様、「レシタティーフ」にはある物語の枠が隠されている。Alice Walkerの「日々使うもの」(“Everyday Use”) (1973) である。そこには同名のマギーという女性が登場する。どちらの短編小説においても、マギーは、社会の最下層に位置づけられた人間で

ある。「レシタティーフ」のマギーは、施設の食事作りを手伝っている老齢の有色女性である。

ピッチブラック

まっ黒ではないが、黒人に見える。知能の遅れがあり、聾啞者である。脚にも障害がある。施設の子どもたちからも馬鹿にされ、その暴力にも曝されているが、話せないし文字を書くこともできないので、誰かにそのことを訴える手段はない。「日々使うもの」のマギーは手と足に障害を持つ黒人女性で、貧しく、容貌も知能も優れず、人々の注目を浴びたことはない。姉のディーはこの彼女の持ち物である祖母のキルトを奪おうとするが、母は初めて娘に逆らってキルトをマギーのもとに戻す。

このウォーカーの短編が、モリスンの短編の大枠の物語枠となっているが、例によって元の物語は換骨奪胎され、まったく違った物語へと変更されている。「日々使うもの」ではマギーは、傍観者となることをやめた母の力を得て、キルトを取り戻し、彼女を踏みつけようとする者に抵抗することに成功した。しかし、「レシタティーフ」にはそのような立派な母親はまったく登場せず、マギーは踏みつけられたままで終わる。マギーを踏みつけた、もしくはそれを傍観したことによって生き延びられた他の少女たちが、マギーに悪いことをしたと後でいくら反省したとしても、後の祭りである。マギーは暗黒の世界に捨て置かれる。このマギーを手がかりに、トワイラとロバータは、施設を出た後も、長年にわたって相互に繋がりをもち続けることになる。トワイラとロバータは、親に捨てられたという苛酷な状況を互いに支えあって乗り切ったが、そうした彼女たちですら——だからこそ、というべきかもしれないが——マギーの窮状に対して同情せず、むしろそれを楽しんだ。

しかし、このマギーがいたリンゴ園は、彼女たちにとって根源的な場所となる。その実際の形状は、トワイラの記憶によれば、「二もしくは四エーカーのリンゴ園で、何百本ものリンゴの木が植わっていた」(90)。トワイラは、「何か重大なこと」が起きたというわけでもないのに、このリンゴ園の夢を頻繁に見る。しかし、それがトワイラの夢に頻繁に現われるということは、精神分析の判断を待つまでもなく、そこで「何か重大なこと」が起きたからである。『タールベイビー』(*Tar Baby*) のジェイディーンは、何故かはわからないが、グレッタガルボ・ハットがたくさん出てくる夢を頻繁に見た。後にそれが重要な事実と関係があることが判明する。グレッタガルボ・ハットは夢の内容の象徴的表現であった。それは死んだ母への思慕を表しており、同時にもう一人の現地人の女テレーズと結びつくものであった。今回の場合も、リンゴ園そのものが重要なのではなく、そこで起きたことがトワイラのトラウマとなっている。そこで起きたこととはマギーに対する暴力を傍観し、楽しんだことであるが、傍観者としての姿勢は一回きりのことではなかったはずだ。リンゴ園のできごとは、トワイラの人生の本質的な一面を切り取り象徴的に表現しているにすぎない。

4. 三角形のきずな

この物語でもっとも重要なのは、トワイラとロバータの二人の友情がどう展開するかである。児童保護施設で出会った二人は同様に最悪の母親を持つ境遇だが、父親は不在、つまり母親以下の存在である。母親は最悪で、トワイラは時々「死んでくれ」と思うが、それでも娘にとっては唯一の肉親という、愛憎入り乱れる二律背反的な存在である。二人の少女は施設長のビッグ・ボウゾウ(ミセス・イトキン)にはないような深い思いやりをお互いに対して示し、強いきずなを形成する。トワイラとロバータは強いきずなで結ばれたはずだが、二人を取り巻く人種的・社

会的状況が二人の友情を成立させないように働く。二人の少女の友情は二人だけでは存続させることは難しい。第三項の存在が必要であり、それがマギーである。

語り手トワイラがマギーのことをどう見ていたかが最初に語られる。以下は、トワイラの、リンゴ園とマギーについての描写である。

I used to dream a lot and almost always the orchard was there. Two acres, four maybe, of these little apple trees. Hundreds of them. Empty and crooked like beggar women when I first came to St. Bonny's but fat with flowers when I left. I don't know why I dreamed about that orchard so much. Nothing really happened there. Nothing all that important, I mean. Just the big girls dancing and playing the radio. Roberta and me watching Maggie fell down there once. The kitchen woman with legs like parentheses. And the big girls laughed at her. We should have helped her up, I know, but we were scared of those girls with lipstick and eyebrow pencil. Maggie couldn't talk. (何故そんなにリンゴ園の夢を見たのかわからない。何もそこでは起きなかったのに。大事なことは何も。大きい女の子たちがラジオをつけて歌っていただけ。ロバータと私は一度マギーが転ぶのを見たことがあった。キッチンで働いている、脚が括弧みたいに曲がってる女の人。大きい女の子たちはマギーのこと笑ってた。私たちはマギーを助け上げるべきだったけど、大きい女の子たちが恐かったの。口紅して眉描いてるし。マギーは口がきけないし。)(90)

しかし、ロバータは、二回めの再会の時、トワイラの記憶を否定し、マギーは自分で転んだのではなく、年長の女の子たちによって殴り倒されたのだと主張する。読者はトワイラを「信頼できる語り手」と見なしてきたので、ロバータの言葉は彼女のみならず読者をも混乱に陥れる。

[Twyla] "I don't remember a hell of a lot from those days, but Lord, St. Bonny's is as clear as daylight. Remember Maggie? The day she fell down and those gar girls laughed at her?"

Roberta looked up from her salad and stared at me. "Maggie didn't fall," she said.

[Twyla] "Yes, she did. You remember."

[Roberta] "No, Twyla. They knocked her down. Those girls pushed her down and tore her clothes. In the orchard."

[Twyla] "I don't—that's not what happened."

[Roberta] "Sure it is. In the orchard. Remember how scared we were?" (...)

[Twyla] "Are you sure about Maggie?"

[Roberta] "Of course I'm sure. You've blocked it, Twyla. It happened. Those girls had behavior problems, you know."

[Twyla] "Didn't they, though. But why can't I remember the Maggie thing?"

[Roberta] "Believe me. It happened. And we were there."

(「マギーのこと覚えてる？ マギーが転んで、あの鬼瓦たちが大笑いしたこと？」

ロバータはサラダから顔を上げて私をじっと見た。「マギーは転んだんじゃないよ」

「転んだよ。覚えてるでしょ。」

「違う。大きい女の子たちがぶって倒したんだよ。マギーを押し倒し、服を引きちぎった。りんご園で。」

「そんな。そんなこと起きてないよ。」

「起きたんだってば。りんご園でね。すごく恐かったこと覚えているでしょ」

「マギーのこと確か？」

「もちろん確かよ。あんたは記憶を封じ込んでいるのよ。確かに起こったことなの。あの子どもたちはいつも問題行動をしていたから。」

「そうだよ。ただどうして私マギーのこと覚えてないんだろう。」

「信じて。それは起きたの。そして私たちはその場にいたの。」 (101)

ロバータの話があってからトワイラはマギーのことが頭から離れなくなり、マギーを通じて自らの内面に深く沈潜することが可能となり、同時に、このような苦しみを与えたロバータとも精神的な繋がりを持ち続けることになる。

三回目の出会いはスクール・インテグレーションの騒乱のさなかである。窮地に陥ったトワイラは、かつて果樹園で手をとりあって年長の女の子たちの攻撃から身を守ったように、ロバータに手を差し伸べ助けを求めるが、彼女はその手をとらず、トワイラの窮状を見物するだけだった。そしてロバータはまたしてもマギーのことをもちだす—

[Roberta] “Maybe I am different now, Twyla. But you’re not. You’re the same little state kid who kicked a poor old black lady when she was down on the ground. You kicked a black lady and you have a nerve to call me a bigot.” (…)

What was she saying? Black? Maggie wasn’t black.

[Twyla] “She wasn’t black,” I said.

[Roberta] “Like hell she wasn’t, and you kicked her. We both did. You kicked a black lady who couldn’t even scream.”

[Twyla] “Liar!”

(「多分私は変わった。でもあんたは違う。以前と同じ施設の子。地面に倒れているかわいそうな黒人のおばあさんを蹴ったのよ。黒人のおばあさんを蹴っておいて、よくもまあ私のことを偏見女なんて言えたもんだわ。」

何ですって？黒人？マギーは黒人じゃない。

「マギーは黒人じゃないよ」

「黒人です。そしてあんたは蹴ったんです。私もいっしょにね。叫ぶこともできない黒人のおばあさんをあんたは蹴ったのよ。」

「嘘だ！」 (165)

この時、ロバータは、二人してマギーを蹴ったこと、また、マギーは黒人であったという新しい情報を提示する。トワイラは「二人してマギーを蹴ったこと」にではなく、「マギーが黒人であったこと」に激しく反応する。トワイラはマギーが黒人であることに気づけなかった。しかし、結局、マギーが本当に黒人であるかどうかは最後まで不明のままとなる。ここにおいて、「本当に黒人」とはどういうことか？という問題がいつの間にか挿入されていることに読者は気付く。

四度めの邂逅において、ロバータは、自分がそう思っただけで、マギーが黒人であるかどうかははっきりしないと前言を訂正する。むしろ、彼女にとって重要であったのは、マギーが精神病院で育てられたという事実であったことがわかる。精神病院はロバータの母親がいる場所である。しかし、同時にそこはロバータが行く可能性のある場所ですとあり続けたし、貧しい生活に疲れたトワイラが将来行く可能性のある場所であるかもしれない。栄養不良の幼年時代を過ごした自分。学歴のない自分。自分のようにしないため、トワイラは家族に栄養のある食べ物を与える努力を続け、息子ジョーゼフを大学にまで入れた。しかし物語最後あたりではトワイラの疲れきった様子が見られる。

「レシタティブ」では、二人の少女の思いが出会いから時をおいて段階的に描かれてきたが、彼女たちのトラウマの中心にあるのは、実はリンゴ園でもマギーでもなく、それぞれの母親である。彼女たちの、自分には責任のない人生の躓きの原因である母、それでも、自分の唯一の肉親である母に対する愛憎は、つねに同じ短いフレーズで表現される。それは二人にしか理解することのできない合言葉である。最初の場面から見ていこう。

最初の出会いで、ロバータの瞬時にすべてを理解するやさしさにトワイラは救われる。同じ境遇の者同士は幼いながらもお互いの傷の深さを知っている。

... I said, "My mother won't like you putting me in here."

"Good," said Bozo. "Maybe then she'll come and take you home."

How's that for mean? If Roberta had laughed I would have killed her, but she didn't. She just walked over to the window and stood with her back to us. ...

... she [Roberta] came over to me and said, "Is your mother sick too?"

"No," I said. "She just likes to dance all night."

"Oh." She nodded her head and I liked the way she understood things so fast.

(「こんな部屋に私を入れるとママが機嫌を悪くするよ。」と私は言った。

「あっそ」とボウゾウは言った。「それじゃ、ママがあんたを連れにきてくれるでしょ。」

なんて意地悪なの。ここでロバータが笑いでもしたら、私は彼女を殺してた。でも、ロバータは笑わなかった。ただ窓のところまで行って、私たちに背を向けて立っていた。

ロバータは近くにきて言った。「お母さん病気なの?」

「うん」と私は言った。「一晩中踊るのが好きだけ。」

「ああ。」ロバータはうなずいた。私は彼女の飲み込みの早いのが気に入った。)

(88, 下線筆者)

十六歳の時の出会い。ロバータに馬鹿にされたトワイラは、それが相手にとってもっとも痛い一撃となることを知っている、精一杯の嫌がらせを言う。相互の秘密を共有する二人は、相手に投げる爆弾は、同時に自分に返ってくる爆弾でもある。

I was dismissed without anyone saying good-bye, so I thought I would do it for her.

"How's your mother?" I asked. Her grin cracked her whole face. She swallowed. "Fine," she said. "How's yours?"

"Pretty as picture," I said and turned away. The back of my knees were damp.

(別れも言わずに立ち去ろうとしたので、私はやってやろうと思った。「お母さん、元気？」と私はたずねた。ロバータのにやりとした笑いが顔中にはじけた。彼女は息を飲み込み、「元気よ。あんたのお母さんは？」と言った。「絵のように美しいね。」そういつて私は踵を返した。膝の裏に汗をかきながら。)(96,下線筆者)

二十八歳の時の二度目の出会いで、結婚した二人はかつてより落ち着き、ともに楽しい時を過ごす。悲惨な過去の状況から抜け出せたことを二人で喜びあう。互いを思いやるために母の話題を出す。

[Roberta] “By the way. Your mother. Did she ever stop dancing?”

[Twyla] I shook my head. “No. Never.”

Roberta nodded.

[Twyla] “And yours? Did she ever get well?”

She smiled a tiny sad smile. “No. She never did....

(「ところで、あんたのお母さん、踊るのをやめた?」

私は首を降った。「全然。」

ロバータはうなずいた。

「あんたのお母さんは、元気になった?」

ロバータは小さく悲しそうに微笑んだ。「全然よ...」(102,下線筆者)

スクール・インテグレーションの人種騒動の中で二人は三度目の再会をする。トワイラはロバータにだけ理解できるプラカードを掲げる—「私のプラカードはロバータのプラカードなしには意味をなしてなかった」(106)。彼女のプラカードはロバータへのメッセージとなり、同時に自分への母への異議申し立てとなる。ロバータの母の権利を訴えるプラカードに対し、トワイラは「子にだって権利はある」、「何故わかる?」、「お母さん元気?」という個人的なメッセージを送り続ける。

[Roberta] MOTHERS HAVE RIGHTS TOO!

[Twyla] And SO DO CHILDREN ****

HOW WOULD YOU KNOW?

IS YOUR MOTHER WELL?(103-106)

しかし、この事件を経て、自己の内面を見つめ直したトワイラは、初めて自己の真実に到達する。

I didn't kick her[Maggie]; I didn't join in with the gar girls and kick that lady, but I sure did want to. We watched and never tried to help her and never called for help. Maggie was my dancing mother. Deaf, I thought, and dumb. Nobody inside. Nobody who would hear you if you cried in the night. Nobody who could tell you anything important that you could use. Rocking, dancing, swaying as she walked. And when the gar girls

pushed her down and started roughhousing, I knew she wouldn't scream, couldn't---just like me---and I was glad about that. (私はマギーを蹴りはしなかった。意地悪女たちといっしょになって蹴りはしなかった。だけど、確かに私は蹴りたかった。私たちはただ見てい
るだけで、マギーを助けようとしなかったし、助けを呼びもしなかった。マギーは私のダンス好きの母親なんだ。耳が聞こえず、口もきけない。誰も家にいなかった。夜泣いても声を聞きつけてくれる人は誰もいなかった。役に立つ大切なことを教えてくれるような人は誰もいなかった。歩く時に、からだをゆすり、踊り、腰を振る。いじめっ子たちが彼女を押し倒して乱暴なことをし始めた時、彼女が叫び声を上げないということを私は知っていた。できなかったのだ。私と同じように。だから、おもしろかったんだ。) (108, 下線筆者)

マギーはトワイラにとって彼女の母を意味していた。子どもの声に気付くことができない「愚かな」母。「耳が聞こえず」、「話ができない」マギーと母が重なる。「夜中に泣いても声を聞いてくれない」、「大切なことを教えてくれない」母。歩きながら揺れて踊る母。しかし、マギー＝母は、次第にマギー→母→自分へと変換される。いじめられても叫ぶこともできないマギーは「ちよ
ど私自身のよう」。それを私はおもしろがっていた。母を痛めつけたいという欲望は、同時に、自分を痛めつけたいという自傷の欲望へと繋がっている。

四度めの再会はクリスマス・シーズンである。二人の葛藤は夏に発生するが(八月、六月、八月)、イースターとクリスマスには二人は友情を形成し、友情を取り戻す。ロバータは再びマギーの話を持ち出す。ロバータは、自分がマギーが黒人であると思っただけということ、そして、自分たちが彼女を蹴ったのでもないと告げる。トワイラを悩ませ続けたロバータの二つの言葉には根拠がないことが判明したが、トワイラは逆にその言葉の正しさをすでに知っていた。ロバータの感情はトワイラの感情と同じ言葉で語られる。二人の心が一つに重なり合う瞬間である。この時ロバータの口から、マギーはロバータの母のように精神科の病院に入っていたこと、そして、自分もまたそのような病院に入るに違いないと若いロバータが恐れていたことが、明らかとなる。ロバータは次のように言う。

And you[Twyla] were right. We didn't kick her[Maggie]. It was the gar girls. Only them. But, well, I wanted to. I really wanted them to hurt her. I said we did it, too. You and me, but that's not true. And I don't want you to carry that around. It was just that I wanted to do it so bad that day---wanting to is doing it.” (109) (あんたの言うとお
り。私たちはマギーを蹴ったりはしなかった。蹴ったのはいじめっ子たちだけ。でも、私は蹴りたかったの。マギーを蹴って傷つけたかった。本当に。私たちがやった、とも私は言った。あんたと私で。でも、それは本当じゃないの。あんたがそのことをいつまでも心に引き
ずってほしくないから。私はあの日とてもとてもやりたかったの。やりたいってことは、することと同じよ。)(109)

ロバータは、トワイラの心の重荷を解くために、どうしてもこのことを言っておきたかったのだと
言う。トワイラは初めて「ありがとう」と言う。現在も必死で病気と闘っているはずのロバータが、自分のことを考えていてくれたことへの、心からの感謝の言葉であった。二人は、マギーに関して、まるで双子のように同じ感情を共有していた。二人は実際にマギーに暴力をふるい

はしなかったが、そうしたいと強く思っていた。そう思いつつ傍観していたことは、実際に暴力をふるったのと同じことなのだ、と気付く。そういう共通の思いを抱いたことによって、二人は互いを理解し、互いを許し、友情を深めることができた。

しかし、第三者として二人の女の友情を媒介しながらも、そのような暴力もしくは暴力的衝動を受け止めなければならない存在「マギー」はいったいどうなるのか？ロバータは最後にうめくようにつぶやく——「ああ、いやだ、トワイラ。いやだ、いやだ、いやだ。マギーはいったいどうなったんだろう？」(110)。マギーは二人の友情が続いていくために不可欠の項として存在した。そうした存在へとロバータとトワイラが思いを至らせたことは、「マギー」は二人の少女から、年齢、人種、場所等どの点においてもはるか遠くに離れてはいるが、両者、すなわち、マギーと少女たちが結びついた証なのである。たとえそれが一瞬のことであったとしても。マギーが旧約聖書の賢人を表す *magi* を暗示する名前をもっていることは、意味のないことではない。マギーは相互的にのみ閉じこもる二人の女の友情を、外の世界へと結びつける役割を果たしたのである。

注

1. スクール・インテグレーションとは、1954年5月17日に下されたブラウン判決に端を発する、公立学校において黒人と白人生徒の共学化を進める政策である。それ以前は、特に南部の諸州では、白人生徒と黒人生徒の別学が行われていたが、1954年の最高裁判決はそれが合衆国憲法違反であると結論づけた。その後長い年月をかけて共学化が押し進められていったが、南部を中心に頑強に抵抗する学校や自治体があり、共学の普及はスムーズには行かなかった。(写真参照)

トニ・モリスンは、2004年、スクール・インテグレーションを扱った優れた写真絵本 *Remember: The Journey to School Integration* を出版し、次のように読者に語りかけた——
“None of that happened to you. Why offer memories you do not have? Remembering can be painful, even frightening. But it can also swell your heart and open your mind. . . . So remember. Because you are part of it.”

2. Cf. [http://en.wikipedia.org/wiki/Newburgh_\(city\),_New_York](http://en.wikipedia.org/wiki/Newburgh_(city),_New_York)

(写真)

School Integration 1954
Fort Myer, Virginia



School Integration





Protesters demand equal rights and school integration

Little Rock Central High School (1957)



School Integration
Little Rock Central High School (1957)



Little Rock Central High School (1957)



Little Rock Central High School (1957)



School Integration
Clinton, Tennessee (Aug. 1956)



New Orleans (Nov. 1960)



Queens,
New York,
Sep. 1959

Works Cited

- Abel, Elizabeth. "Black Writing, White Reading: Race and the Politics of Feminist Interpretation." *Female Subjects in Black and White: Race, Psychoanalysis, Feminism*. Eds. Elizabeth Abel, Barbara Christian, and Helene Moglen. Berkeley: U of California P, 1997. 102-131.
- Baraka, Amiri and Amina Baraka. *Confirmation: An Anthology of African American Women*. New York: Quill, 1983.
- Goldstein-Shirley, David. "Race and Response: Toni Morrison's "Recitatif." *Short Story* 5.1 (Spring, 1997): 77-86.
- Harris, Trudier. "Watchers Watching Watchers: Positioning Characters and Readers in Baldwin's "Sonny's Blues" and Morrison's "Recitatif." *James Baldwin and Toni Morrison: Comparative Critical and Theoretical Essays*. New York: Palgrave, 2006. 103-120.
- Morrison, Toni. *Beloved*. New York: Knopf, 1987.
- *Jazz*. New York: Knopf, 1992.
- *Love*. New York: Random House, 2003.
- *Paradise*. New York: Knopf, 1997.
- "Recitatif." *Skin Deep: Black Women and White Women Writes About Race*. Ed. Marita Golden and Susan Richards Shereve. New York: Anchor, 1995.
- *Remember: The Journey to School Integration*. Boston: Houghton Mifflin, 2004.
- *Song of Solomon*. New York: Knopf, 1977.
- *Sula*. New York: Knopf, 1973.
- *Tar Baby*. New York: Knopf, 1981.
- Walker, Alice. "Everyday Use." 1973. "Everyday Use." Ed. Barbara T. Christian. New Brunswick: Rutgers UP, 1994. 23-35.
- 森あおい. 「『レシタティブ』から『パラダイス』への移行—人種は何を語るのか」『英語世界のナビゲーション』、青鞞社、2003. 113-166.

<SYNOPSIS>

The Triangle of Female Bonding in Toni Morrison's "Recitatif"

In this paper, "Recitatif," Toni Morrison's only short story, is analyzed from four viewpoints: race, history, narrative framework, and female bonding. First, the viewpoint of race is discussed. Of the two protagonists in this story, Twyla and Roberta, one is black and the other is white. Although the readers are forced to guess who is black and who is white, all efforts to do so are in vain; these characters' races are never able to be disclosed to the readers.

Second, the viewpoint of history and society is discussed. Although many of the things and events in the story can be identified with reality, those historical facts turn out unimportant in the end.

The third point is the narrative framework. "Recitatif"'s narrative framework is based on Alice Walker's short story "Everyday Use," but Morrison changes the latter to a completely different story. The character common in both stories is the woman named Maggie, who lives in the lowest stratum of the society. However, Maggie in "Recitatif" is far more handicapped and helpless than Maggie in "Everyday Use." Paradoxically, because of this utmost helplessness, she assists Twyla and Roberta, who were abandoned by their parents, in uniting and supporting each other.

This fact leads to the fourth point: the female bonding. Having Maggie as their mediator, the two girls could develop their friendship and connect it with the outside world. The indispensability of the third woman for the development of their relationship cannot be ignored, but regrettably, they can recognize the importance of her existence only much later.